様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　6　日現在

機関番号：33936
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520536
研究課題名（和文）　英語比喩表現の量的・質的調査に基づく豊かな英語力育成のための教材システムの開発
研究課題名（英文）　Developing a teaching system for improving English proficiency —A quantitative and qualitative research on English metaphorical expressions
研究代表者
岡　良和（OKA YOSHIKAZU）
人間環境大学・人間環境学部・教授
研究者番号：00213918

研究成果の概要（和文）：主に国内の高校の教科書を用いて高頻度の重要比喩表現を抽出し、そのリストを作成した。そしてこのリストに基づいたテストを作成し、大学生がこれらの表現を習得しているかを検討した。そして重要比喩表現に存在する発想のパタンを考察することで、どのような比喩表現をどのように教えることが効果的かを明らかにする中で、一般的には具体的な意味から抽象的な意味の順に導入することが望ましいことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：We collected important metaphorical expressions which are often used in English textbooks for Japanese high school students. We then made a test on these important English metaphorical expressions, and administered it for college students. We also investigated the cognition lying in these English metaphorical expressions and tried to show how to teach these expressions effectively. It is found out that we should teach concrete meanings first and then go on to teach abstract meanings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,500,000 円	750,000 円	3,250,000 円
2009 年度	200,000 円	60,000 円	260,000 円
2010 年度	400,000 円	120,000 円	520,000 円
年度			
年度			
総　計	3,100,000 円	930,000 円	4,030,000 円

研究分野：英語教育
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：コーパス言語学、認知言語学

１．研究開始当初の背景

比喩研究の系譜は２つに区分することができる。まず、認知言語学の一分野として比喩の構造を解明しようとした研究としては、Lakoff and Johnson（1980）、その他がある。これは、人間の言語認知から比喩表現が意味を生成するメカニズムを分析しようとしたものである。この延長線上に、認知言語学の比喩研究を英語教育に活用した岡(200

7, 2008)を位置づけることができる。

次に、英語教育との関係で比喩の効果を探った研究としては、Cameron and Low (1999)、Mc-Carthy (2001)、Littlemore and Low (2006)等の研究がある。これらの研究は、比喩のメカニズムに対する理解が言語能力に影響を及ぼすと指摘している。また、研究分担者でもあるAzuma (2005)では、学習者の語彙力と比喩理解・運用能力との間に有意な関連性があることを実証している。２つの立場は比喩の解明に大きな成果を残したが、日本の英語教育という環境の中で、どの比喩を、どのような順で、どのように指導すべきか、ということについては、いまだ明確な指針が出されていなかった。

２．研究の目的

１．定量的アプローチにより、高頻度の重要比喩表現を抽出し、教育用リストを作成すること。

２．定性的アプローチにより、重要比喩表現に存在する発想のパタンを明らかにすること。

３．教材・教授法・評価法からなる比喩指導の具体的方法論を提唱すること。

１．については、英語教科書を総覧するコーパスを作成し、統計的手法をふまえつつ、コーパスから高頻度比喩表現を定量的に抽出する。

２．については、１．で得られた高頻度比喩表現に対して定性的な分析を加える。具体的には、従来の認知言語学や比喩に関する研究で得られた知見をふまえ、比喩の言語構造と人間の認知構造の関わりを利用し、得られた高頻度比喩表現を学びやすさと汎用性を軸に、メタファー、メトニミー、シネクドキーなどの観点から、質的に分類・区分する。以上１．と２．が本研究の基礎データとなる。

３．では、２．で得られた分類や区分をもとに、実際に抽出・分類された重要比喩表現を教材として提示する方法を考察し、具体的な教材と認知の仕組みを利用した、無理なく理解できる教授法を提案する。

３．研究の方法

現行の中学校、高等学校の主要な英語教科書を利用し、資料となる表現を収集した上で、頻出比喩表現のテストを実施し、テストの結果を、比喩の構造や比喩の理解プロセスに関する理論的枠組みを利用して比喩表現を分析した。

具体的には、日本の英語教科書会社のうち５社が英語Ⅰ及び英語Ⅱの初級、中級、上級の教科書を出版しているので、これらの３０冊の教科書を Ant. Conc.を使って分析した。分析対象は基本動詞のうち、“make,” “take,” “give,” “get,” “put,” “bring”
に抽象的な名詞が後続する表現とした。

次いで、愛知県のある大学で「英語の比喩表現に関する調査」を 2010 年の１０月末に実施した。この調査には日本語を母語とする１年生から４年生までの４０名の学生が参加した。内訳は１年生 11 名、２年生 18 名、３年生５名、４年生６名である。全員が日本において中学校から大学まで６年から９年の英語教育を受けてきている。英語を専攻している者はいなかった。調査の目的と処理方法は、以下のようである。

目的１　読書の時間や漫画を読む時間と比喩の知識との相関関係はあるのか？

方法：　調査用紙の読書時間と漫画を読む時間についての回答と比喩テスト（動詞）の個人合計点を利用

目的２　日本のことわざや格言の知識と比喩の知識との相関関係はあるのか？

方法：　調査用紙のことわざ・格言に関する設問の個人合計点と比喩テストのそれぞれの個人合計点を利用

目的３　語彙の知識と比喩の知識との相関関係はあるのか？

方法：　語彙テストの個人合計点と比喩テストのそれぞれの個人合計点を利用

目的４　動詞の比喩表現の理解度と前置詞の比喩表現の理解度との相関関係はあるのか？

方法：各動詞の個人合計点と前置詞の個人合計点を利用

目的５　同じ動詞でも比喩表現により理解の差が生じるのか？

方法：　各動詞についての全学生の合計点や正答率を利用

目的６　同じ前置詞でも比喩表現により理解の差が生じるのか？

方法：　同一の前置詞において正答率を比較

４．研究成果

まず、定量的アプローチによりアジア圏教科書における直喩を分析したところ、アジア圏教科書における比喩の扱いについては量的にも質的にもいまだ改善の余地が残ることが示唆された。今後、比喩の観点をより取り入れた教材の制作が求められる。

日本国内では、高校で使用されている英語Ⅰ・Ⅱの教科書を対象に高頻度の重要比喩表現を抽出し、

(1) 動詞については、その総数は、初級用教科書から上級用教科書へと上昇する。

(2)　どの動詞においても比喩の出現数を動詞の出現数で割った値は初級者用の教科書から上級者用の教科書へと上昇する。

ことが判明した。

さらにこれに基づいたテストを作成し、大学生がこれらの表現をどの程度習得しているかを調査した。この結果、

(1) 比喩表現の習得度は語彙の習得度と相関が強いことが判明した。

(2) 読書の時間のみならず、漫画を読む時間も、比喩テストの得点と関係がある、という示唆を得た。

(3) 日本のことわざや格言を知っているかどうかは、英語の基本動詞や前置詞がかかわる比喩的拡張表現の知識とはほとんど関係がないことが示唆された。

(4) 動詞の比喩表現の知識と前置詞の比喩表現の知識との関係は「かなり相関関係がある」ことがわかった。

動詞の意味拡張という点では、英語Ⅰ・Ⅱの教科書について、レベルが初級から中級、上級に上がるに従って動詞が比喩的に使われる割合が高まることも判明したが、海外で国語教育に用いられている教材における比喩表現の扱いや、BNC を用いた動詞や形容詞・副詞との共起を調査した結果、日本の英語教育で比喩表現をより積極的に扱う必要性が指摘された。

比喩指導の方法については、授業で学習者に「ことば」の奥深さを認識してもらうことを目的とし、まずは比喩的表現に気付かせることから始め、誰にでも理解される普遍的な発想による表現や類推で理解可能な表現へと進み、次いで特定の文化に根ざす比喩表現もあるという認識を持たせる。さらに、比喩（メタファー）の仕組みを学習し、比喩的表現の使用可能性という産出面についての認識を高める。最後に比喩的表現を使ったパッセージを書く、などの段階を踏んだ教授方法を提案するとともに、高校の英語教科書を例にとり、比喩を活用した授業実践を提案した。

今後の課題として、定性的アプローチによ

り重要比喩表現に存在する発想のパタンを考察することで、どのような比喩表現をどのように教えることが効果的かをさらに明らかにすることが英語教育にとって重要と思われる。

一般的には具体的な意味から抽象的な意味の順に導入することが望ましいであろう。たとえば、make の基本的な意味は、「具体的な材料に手を加えて具体的な何かを作り出す」と考えられよう。ここから、make friends, noises, mistakes, a difference などのように、目的語が具体的な物ではなく抽象的なものになる表現についてもメタファー的拡張を利用すれば、人間の持つ自然な発想により理解ができるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①石川慎一郎、アジア圏の英語教科書に見る比喩表現の使用―コーパスに基づく計量的分析、中部地区英語教育学会紀要、査読有、第40号、2011

②岡　良和、高校英語教科書における直喩―コーパス言語学からのアプローチ―、人間環境大学歴史・文化環境専攻紀要、査読無、第６号、 2010、36－41

③Masumi Azuma and Jeannette Littlemore、Promoting figurative creativity in EFL/ESL classrooms 、*JACET KANSAI JOURNAL*、査読有、第 12 号、 2010、8－19

〔学会発表〕（計３件）

①岡良和・東眞須美・石川慎一郎、教科書で扱われるメタファーの研究：動詞、形容詞、前置詞を対象として、全国英語教育学会、2010年8月7日、関西大学

②石川慎一郎、アジア圏の英語教科書に見る比喩表現の使用―コーパスに基づく計量的分析、中部地区英語教育学会CELES第40回記念大会、2010年6月26日、石川県立大学

６．研究組織

(1)研究代表者
岡　良和（OKA YOSHIKAZU）
人間環境大学・人間環境学部・教授
研究者番号：00213918

(2)研究分担者
東　眞須美（AZUMA MASUMI）
神戸芸術工科大学・名誉教授
研究者番号：80212504

(3)連携研究者
石川　慎一郎（ISHIKAWA SHIN’ICHIROU ）
神戸大学・准教授
研究者番号：90320994